

阿嘉島の蝶 Part 13

上林 利寛

A M S L 調 理 担 当

園芸植物に依存するカバマダラ

Butterflies in Akajima Island, Part13.

Plain tiger *Anosia chrysipus* that is relying upon the gardening plants in border

T. Kamibayashi

カバマダラ（マダラチョウ科）は沖縄では普通に見られる蝶ですが、阿嘉島では、同じマダラチョウ科のリウキュウアサギマダラやオオゴマダラの様に頻繁に観察できるわけではありません。それは、幼虫期の食草が島内では花壇に植えられたトウワタ（ガガイモ科）に限られているためだと推察しています（写真1）。

トウワタは南アメリカ原産の多年生草本で、園芸植物として江戸時代に日本に持ち込まれたそうです。冬でも暖かい気候が適していたためか、沖縄の各地で野草化し、群生している雑草も多い様です。しかし、阿嘉島ではそういった場所はなく、民家の庭先などに少数が植えられている程度です。また、稀に綿毛をまとった種子が風に運ばれて、運よく落ち着いた先で発芽し生育することもあります。群生するほどではない様です。成虫のカバマダラの生息する場所は民家周辺の日当たりの良い開けた所に限られていて、多くの場合、トウワタの花で吸蜜するかその周辺で翅を休めて、花壇の近くから離れずにいます。このことは、リュウキュウアサギマダラやオオゴマダラが雑木林から開けた草地あるいは海岸近くの林の中まで、広い範囲に生息しているのとは異なります。リュウキュウアサギマダラの幼虫期の食草ツルモウリンカ（ガガイモ科）と、オオゴマダラの幼虫期の食草ホウライカガミ（キョウチクトウ科）は、この2種の蝶が生息する範囲に広く分布しています。阿嘉島のカバマダラは花壇に植えられたトウワタだけで繁殖し、次の世代へと生き継いでいるのでしょうか？やはり、それ

は困難な気がします。カバマダラの繁殖期には数少ないトウワタに産卵が集中するため、卵から一斉に孵った幼虫たちはまたたく間にトウワタの葉を食べ尽くしてしまいます。トウワタはとても丈夫な植物なので、カバマダラの幼虫に丸裸にされても新芽を出して生きています。しかし、丸裸にされたトウワタは見栄えが悪いので、島ではすぐに引き抜かれてしまうのです。こうなると、カバマダラたちは、自ら生息場所を狭めていることとなります。おそらく、数匹のカバマダラがどこか他の場所から阿嘉島に飛来して、毎年、わずかなトウワタを見つけ出して産卵している、と考える方がよいでしょう。

花壇のトウワタから程近い場所のモンパノキ（ムラサキ科）に2匹のオスのカバマダラを見つけました。それは、乾燥した樹皮に口吻を伸ばして、何かを舂め撮っている様子でした（写真2）。このモンパノキでの行動は、他のマダラチョウ科のアサギマダラ、リュウキュウアサギマダラ、スジグロカバマダラでも観察したことがありますが、オスの個体がフェロモンの前駆物質を摂取するためだと言われています。

2月の寒空の下、トウワタの茎にしがみ付く様にじっとしているカバマダラの幼虫を見つけました（写真3）。阿嘉島では、幼虫・蛹・成虫といったさまざまな形態で冬を越し、暖かな日には少数ながらトウワタの花で蜜を吸うカバマダラの成虫を見ることもあります。



写真1. トウワタの花で吸蜜するカバマダラのオス。本種は南西諸島に分布するが、本土での迷蝶記録も多く、高温期には一時的に発生することがある。また、九州南部などで越冬する個体も確認されている。トウワタ以外に本土に広く分布する野生種のガガイモ（ガガイモ科）を幼虫期の食草とする。



写真2. カバマダラのオス2匹（後翅に性斑がありメスにはない）モンパノキ（ムラサキ科）でのフェロモン前駆物質の取り込みと言われる行動。



写真3. トウワタの茎に静止するカバマダラの終齢幼虫